

## 令和元年度第2回千葉県博物館協議会会議 議事録

日 時：令和元年11月29日（金）13：30～15：45

会 場：千葉県立房総のむら 総屋2階会議室

出席者：委 員 岡本委員（議長）、西田委員（副議長）、内山委員、浅岡委員、  
細井委員、齊藤委員、関沢委員

博 物 館 藤田房総のむら館長、渡辺美術館長、望月中央博物館長、  
矢島現代産業科学館長、鈴木関宿城博物館長

文化財課 植野学芸振興室長

館内視察：13：30～14：00（商家町並み～武家屋敷～上総の農家）

### 1 開会【事務局】

委員10名のうち7名の出席により会議は成立。

傍聴希望者なし。

### 2 館長あいさつ【藤田房総のむら館長】

### 3 房総のむらプロモーションビデオ（ダイジェスト版）上映

### 4 議事 「博物館利用者の自己実現への支援について」

議 長：今回は、房総のむらを中心に、自己実現への支援というテーマで協議します。房総のむらからテーマについて説明をお願いします。

房 総 の む ら：説明

議 長：今房総のむらから自己実現への支援についてのむらの取り組み等について説明がありましたが、御意見・御質問ございますか。

議 長：（資料にあった）野田の博物館のキャリアデザインの取り組みや北海道における異世代の交流とは、具体的にはどういうものか。ユニークなことをやっているのか。

房 総 の む ら：野田の方はまだ具体的な動きとしては出ていないようである。

北海道の方は、地域の博物館と一緒に、高齢者の知識と経験を生かして、地域の資源のマップを作製したり、地域の資源の探索ツアーを企画し

たり、昔の道具の使い方を動画で撮影したり、学習会等を行っている。これらに参加した高齢者の方の満足度が高いという報告が上がっている。

委員：(説明にあった)ユニバーサルマナーとはどういうものか。

房総のむら：健全者にとっては問題の無いちょっとした段差でも、高齢者や車いすの人にとってはどうだろうかというような相手側の立場に立って思いやる気持ち、そういった考え方のことである。

バリアの多い当館では、なかなか解消できないわけですが、ハードでは無くソフトな面、具体的には職員がお手伝いをしていくなどして補っていかうとするものである。

委員：久しぶりに来館し、前回視察できなかったところを見せていただき、こういった時代を知っている世代としては懐かしさを感じた。今後自己実現をしながら、次の次の世代にこのような感覚を伝えるのはなかなか難しいのではないかと思う。いろんな体験とか工夫はしていると思うし、今技術を知っている人がいて、人を育てることも行っている。体験の中にはグレードがあり、重ねて上級に行く人がいるが、そういう人からボランティアに結びつく人はいるのか。体験を通じてボランティアに昇格していくという道筋があっても良いのではないだろうか。

房総のむら：ボランティアに来た人から職員、体験に来た人からボランティアにといった例はある。

議長：今日のテーマに関連して、各館の取り組みはどうなっているのか。

美術館：みる、かたる、つくる(鑑賞、講演会、作品を作る)の3つのキーワードで美術館活動を行っている。つくるに関しては、大人、子ども向けの体験講座を実施している。大人向けでは、陶芸をはじめとした6講座、また友の会主催では絵画、写真などの12講座を実施し、高齢者の生涯学習的な場となっている。子ども向けでは、子どもの日に美術館の中庭で模造紙に大きな絵を描くというワークショップを実施している。県民の日のワークショップでは子どもたちが日本画教室に参加している。オリジナルモノレールを作るというワークショップでは、職員がモノレールの会社に出向いて実施している。また、今回の特別展に関連して子ども向けワークショップ「もこもこ盛り上げ岩絵の具」を実施している。

博学連携では、学習キットの利用、学校へ出向いての授業、先生向けの講

座、職場体験やインターンシップ、博物館実習等を行っている。

今年度からボランティアをミュージアムサポーターという名称に変更し、33名が活動している（60歳以上が25名）。情報資料室の運営の補助、子ども向けのワークショップの補助を行い、今年度から美術館ガイドも行うために研修を実施している。

中央博物館：外部研究員の受け入れを行っている。市民研究員あるいは共同研究員といった立場で受け入れし、館の職員と一緒に研究をしている。

また、自主的に運営している8つの中央博サークルがあり、館の職員が助言等を行っている（地学同好会、苔のサークル、歴史のサークル等）。週1回～月1回の頻度で、300名ぐらいが活動している。

ボランティアでは、展示室の解説、標本等資料の整理、調査研究の手伝い、観察会・イベントの手伝い、生態園での来園者の対応等がある。今年度は170人以上が登録している。

この3つについて、重複登録もあるが、手伝ってもらったり、館が手伝ったりすることで自己実現につながる場となっている。

現代産業科学館：大人から子供まで、産業に応用された科学技術を体験的に学んでもらうことが館の大きな目的となっている。来館者は、小学校以下の子どもと保護者が中心である。そのため、小学生以下を対象とした実験工作教室を開催している。スタンプカードを導入し、貯まると「ちびっこ博士認定証」という賞状を渡している。リピーターの子どもも多い。また、職員が学校や公民館等に出向いて行うこともある。職場体験、インターンシップ、理科の先生向けの研修を実施している。

ボランティアは仕事をリタイアされた方が中心だが、実験工作教室と一緒に入ってもらい補助してもらっている。

関宿城博物館：平成30年度の来館者96,000人のうち、6割が65歳以上である。

講座・教室、ワークショップ、講演会ではリピーターも多い。これに対応するために古文書講座では入門編、初級編といったものを作っている。そば打ち、城下の様子を巡るといったものにもリピーターが多い。他館同様に職場体験、インターンシップ、博物館実習、教員向けの研修等も行っている。ボランティアでは、展示解説、資料整理、講座補助等、62日間、のべ82人に参加してもらっている。

野田市郷土博物館と協力し、地域ネットワークとして地元を知るための文化財の町歩きマップを作成中である。

議 長：自己実現をどのように社会に還元していくのかという視点は重要である。報告にあった地域づくりにどうやって結び付けていくのか大きなテーマである。

委 員：歴博でも他館と同じような活動を行っている。ボランティアや友の会が有力なサポーターとなっているが、一方ではやや閉鎖的になっているのではないかということ、そして高齢化ということが起きている。若い世代に入ってもらいやすくすること、より広く開いていくことが課題となっている。閉じてしまうと限定的な人たちの自己実現となってしまう。

議 長：ボランティアが閉じてしまうのは、館側の問題なのかボランティア側の問題なのか。

委 員：仲間になってしまい、新しい人が入りにくくなってしまっている。

議 長：何か開いていくような方法はあるのか。

中央博物館：(高齢化に関しては)中央博物館でも同じような状況である。若い人にサークル等に参加してもらいたいが、平日の昼間に参加できるのは退職者か主婦の方に限られてしまう。月に1回でも良いので、土日開催の日をつくるなど、中学生等が参加できる仕組みを考えたい。

文化の日に「自然誌フェスタ」というイベントを開催しており、ボランティアやいろんなサークルが出展する。このときに子どもが多く来館するので、子どもが喜ぶメニューを用意し、後継者になるような人をスカウトする場面として活用している。世代が若返るように意識はしているが、母数に占める退職者の割合が大きすぎる状況である。

議 長：若い人は時間的な制約があって、ボランティア活動に入っていけない状況はどこでも同じである。

房 総 の む ら：むらのボランティアは少人数での活動が多い。体験では、同じ体験に同じ人ばかりが入ることにより指導者とも顔なじみになり、沙龙的になってしまうことがある。今後は体験の受け付け方等で改善していく。

県の雇用労働課や支援団体と調整中だが、ニートとか引きこもりの人をまず家から出してもらおうお手伝いもできればと思っている。むらにきて何かを感じ取ってもらおう。将来的には、ボランティアや職員、そして伝統工芸の

後継者の確保につながればと思っている。

議 長：体験型で、屋外でいい空気を吸いながらここで再出発してもらおうというのはいいいアイデアではないだろうか。

委 員：千葉県生物学会と長く関わっており、(中央博物館の)「自然誌フェスタ」にも協力している。11月23日に毎年行っている70回を超えた児童生徒の発表会がある。今回小学生～高校生で30件の発表があった。小中学生の発表が増えてきており、また博物館の学芸員の指導を受けて能力を伸ばしていくことが増えてきている。若い世代と博物館との関わり方として、体験だけでなく発表の場を設けるとよりよいのではないかと。

委 員：森田知事が来られることはあるのか。

房 総 の む ら：何度か来館していただいており、11月3日のふるさとまつりには餅まきにも参加してもらっている。

委 員：森田知事にはアウトドア活動をやっているイメージがある。むらではそういった遊びはできるのだろうか。

博物館には3つの柱、調査研究、資料収集、展示教育があるが、今日の話で4番目に自己実現という柱が生まれつつあるのではないかと思う。博物館は来館者にとっても、職員にとっても、ボランティアにとっても自己実現の場だと思う。また新たな職業教育の場、更生施設、高齢者と若い世代の世代間交流の場でもあるのではないかと。もっと広い意味でとらえると伝統文化を新しい世代に継承していくことになる。房総のむらでしかできないことは何かを考えていくと、子供の頃屋外で様々な遊びをしていたが、こういった遊びを通じて、大地・空・海などの自然相手に体験していたことが、将来の自己実現に繋がっていくのではないだろうか。遊びを通じて、エコミュージアムであり、野外型の博物館、古代の遺跡を現地で保存している房総のむらで自然と触れ合う、エコミュージアムでしかできない方向でもっと可能性があるのではないかと思う。自己実現というのは大変素敵なキーワードだと思う。

委 員：私達は子ども会で昔の遊びのプログラム(小4から小6)を一年かけてやっている。小学生を指導するのが中学生、それを高校生、大学生がサポートしている。楽しかった、おもしろかったという気持ちを新しい次の世代に伝えていく。毎年同じだと飽きてしまうので、3年分のプログラムを作

って違うことをやっている。現在は36、37歳の人にとりまとめているが、小4のときから参加している人である。人材育成は非常に年月がかかり、ボランティア意識を育てることも非常に長い年月がかかる。ちょっと行って竹細工をやって10分、20分やってできたではまるでダメなんです。

最近子どもだけで外で遊ばせることはほとんどない。親は誘拐などの犯罪を怖れており、「目を離すと何をされるかわからない」という意識がある。地域の中で大人が目配りしないといけない。でも大人も忙しいので、意図的にプログラムを組んで、みんなで見守りながら、やっていく必要がある。

息の長い活動が必要で、それを博物館に求めるのは非常に難しい。色の付いたダルマでは子どもの創造性が育たない。白いダルマと水・絵の具・筆を与えると子供は自由なのを作る、ただ3時間ぐらいかかる。時代時代に合ったプログラムを作る必要があり、人材育成には長い時間がかかる。

委員：小学生がここに見学に来ることは、次世代に繋がる宝ではないか。房総のむらは歴史・文化が凝縮されており、伝統文化、工芸、暮らしなどが味わえ、そこから興味を持ち、県内の各地に行ってみると自分の学びを広げるきっかけの場ではないか。そして千葉県をより深く知ることがゴールになるのではないか。

私も城に興味はなかったが、関宿城博物館に行って城の良さに気付いた。むらにきて博物館のおもしろさを知って、深く学んでみたいとなる。深く学ぶと誰かに伝えたいくなる。学んだことを発揮する場を設けることで、学びの循環ができるのではないか。それをうまく生かすと社会貢献や地域への還元につながる。

委員：房総のむらには千葉市の多くの小学校が来ている。小学3～4年生が多く、体験型ということが子どもたちにとって大変魅力的である。いろいろな体験ができ、実感を伴った学びができる。事前にワークシートを子どもたちに配布しておくことで目的意識をもって活動する。

学習指導要領では伝統文化を学ぶとあり、子どものうちからこういった場所で見聞き体験することで興味関心が高まって、将来につながるのではないか。体験以外にも、子どもに小遣いを持たせると有効に使う。時間やお

金を勘案し色々考える。より短い体験も作ってもらえるとありがたい。

委員：学会が中央博と仕事している時に、限定した組織に対して行政がかかわるのはいかなものかといった意見もあった。限定的というけれども、興味を持って、自分の体験を通して社会に貢献しようとしている意思を持った人が多く集まっている、あるいは将来の意思を持つような子どもたちが集まっている、そういった人たちに場所を提供することは文化の創造と継承といった大きな目標に向かって有益なことである。良質な知的な刺激を求めてくる人には与えていくべきである。こういった人たちにはどんどんサービスしていい。最終的には全体に還元されるわけですから。行政は自信をもってやってほしい。

議長：自己実現をどうとらえるのか。個人だけのものではなく、それをどうやって還元するのかということが重要である。その場の一つとして博物館が存在している。すぐに結論がでるものではなく、これから先のテーマでもある。

## 5 諸連絡【事務局】

第3回の協議会はボランティアをテーマに、2月後半～3月初めに開催予定。

## 6 閉会